厚高同窓会報

旧制中学卒業者　3,915名　計 26,426名
新制高校卒業者　22,511名

発　行
神奈川県立厚木高等学校同窓会事務局
TEL046（221）4078～9
FAX046（222）8243

印　刷　所
厚木市妻田南2－4－32　㈲厚木タイプ印刷
TEL046（222）3027

第　38　号　　平成16年8月14日

躍　動

育英事業の発足について

厚木高等学校同窓会々長
山田恒雄（中二十七回）

同窓の皆さまお元気ですか。一昨年挙行された百周年の記念行事や、続いて行われたダンスドリル部の米大陸に於ける快挙などは、嫌が上にもわが母校厚木高校の名声を博し、これを契機に某紙にまとめられた資料によれば、我が母校厚木高等学校は全国名門校百校の一に取り上げられるという栄誉に輝いたのでありますが、問題はこれからであります。此の栄誉と名声を如何にして今後に伝えていくか、関係者一同が同じ思いに駆られていた矢先、なんと行事終了後の剰余金が一千余万円もあるとの報告を受け、これを以て今後に続く若者の育英の資に充てるべきではないかとの意見は一致し、ここに県立厚木高等学校育英会（仮称）が発足する運びと相成り、目下校内事務局に於て着々とその準備が進められているところでございます。

君子に三楽あり

皆さま既にご案内の如く、この育英若しくは教育という言葉が使われたのは「孟子」の「尽心篇」に出てくる三楽の一つとしてではなかったかと思われるのでありますが…。

孟子曰く、君子に三つの楽（たのしみ）あり、…父母共に存し兄弟故なきは（一家が平和であることは）一の楽なり、仰いで天に愧じず、俯して人に恥じざるは（やましい心を持たないことが）二の楽なり、天下の英才を得てこれを教育するのは三の楽なりと。

それにしても二千数百年の昔、孔子の生きた春秋の世より更に激しい戦国の世を『自ら反りみて縮（直）くんば千萬人と謂えども吾往かん』と云う程の気概を以て駆け抜けた孟子でさえも、流石に晩年故郷の鄒に帰って枯淡の生活に入った時、始めて残した児孫への想いが、此の教育ー育英という言葉だったのではないでしょうか。

どうぞ皆さま方の想いの籠るこの育英の事業が立派に実を結びますよう重ねてお願いを申し上げてご挨拶にかえます。

我が学舎に着任して

教頭　山田　和彦（高二十四回）

本年四月、「尼の泣き坂」の満開の桜に迎えられ、県立大和東高等学校から着任をいたしました。三十五年というブランクを経て、我が母校に通うことになるとは、夢想だにいたしませんでした。内示を受けた際の惑いは、今でも忘れません。しかし、一旦、命を受けたならば、己が全知全霊をかたむけて、職務に邁進いたすつもりですので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

さて、現在、ご承知のとおり、県立高校を取り巻く状況は、非常に多難なものがあります。どこの学校でも、己が勤務する学校をいかに存続させるか、いかに再編も含めて発展させていくか、そのことに心を砕いている教職員は多いと思います。私自身も昭和五十年代後半の新設校設立も経験し、またいわゆる「課題集中校」のリフレッシュにも一翼を担った経験もございます。このような改革の波は、百年を経た我が厚木高校も例外ではありません。

しかし、一口に改革といっても、そう安易なものではありません。過去からの経緯を分析する一方、将来はこのようになるという具体的な展開を持つことにより、初めて可能になると思います。人はどうしても、現状・現実のみを見て、場当たり的な方策を考えようとします。「自分がいる間だけ……」「今さえよければ……」という意識があり、責任の不明確さがあります。しっかりとした展望に基づいたプランを立て、それを実行する。そして行ったことに対して再検証をし、再び行動をする。どこの組織でも行れ、多くの皆さんがご承知のとおりのシステムですが、このような活動なくしては、地に足をつけた改革は考えられません。

さてそれでは、本校において、どのような改革が考えられるか。現状のカリキュラム等を見ると、そこから浮かびあがるものは、オールラウンドな基礎学力を充実させて、受験に備え、奥行きのある進路選択を可能にするという意図がみえます。言い換えれば、昔ながらの高等学校ということになります。昨今の高校改革では、選択科目を多く置き、自分に合ったものを選ばせる学校が多くなっている中では、珍しいかもしれません。ただ、この昔ながらの学校を維持するためには、一層の教職員の骨おりと生徒の自覚が必要です。まず教職員の骨おりとは、このようなカリキュラムであるからこそ、学習に関する質・量とも、さらなる充実が必要になるということです。また生徒の自覚とは、今、厚木高校では、「自由な校風」という言葉がいたるところで使われており、それを誤って受け取っている生徒が多いということです。しっかりとした自律・自制の精神なくして、「自由」という言葉はありえないということを指導していかなければならないと痛感しております。

さて、このように思いつくまま雑駁なことを書きつけましたが、私自身、未熟であり、学校長のご指導のもと、一層精進いたす所存でございます。同窓の皆様にも何卒、ご理解・ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

支部会便り

後輩から もらう よろこび

伊勢原戸陵会々長　近藤　俊二（高六回）

突然、テレビのトップニュースの画面に『神奈川県立厚木高校・全米チアダンス選手権・グランプリ獲得!!』の文字が飛び出し、華やいだカラフルな舞台と、気合に満ちた若さあふれる女性たちが跳ねるシーンが展開された。

同窓生が、いや神奈川県民の誰もが描く「厚木高校」というイメージに、ほど遠いところでの今回の快挙に、拍手喝采の前に〝びっくり仰天〟という表現の方が、正直な印象であった。

二月下旬に厚木連合戸陵会の肝いりで開かれた激励会に、伊勢原戸陵会として、心ばかりの激励金を持って参加した時も、「気楽に行っていらっしゃい」ぐらいの気持ちであった。

街で同窓生に会うたびに「おい見たか？すごかったなぁ」と…誇らしい毎日が四月の祝勝会まで続いた。

一昨年の一〇〇周年記念事業のエネルギーが、まだ鮮やかに残っているこの時期故に同窓の喜びもひとしおであったと思う。

インピッシュ23名の皆さん、素敵でした。本当にありがとう。

さて、私ども「伊勢原戸陵会」は、前身の「白ふろしきに小倉服をなつかしむ会」から数えて、本年が54年目を迎えております。

発足した昭和25年は、まだ戦後の物のない貧しい時代ではありましたが、先輩方には共に通った戸室ヶ丘の中学時代を懐かしむ余裕が生まれ始めたということだったのでしょうか？　以来、大勢の先輩方に支えられて今日まで半世紀余りの道を歩んで参りました。

現在は、五月の第二土曜日を総会の日と定め、80～90名ほどの参加を得て盛大に総会をもっております。伊勢原出身の山田同窓会長をはじめ、学校長、事務局、堀江市長（高七回）のご臨席を仰ぎ、更にお隣の秦野市部会、厚木連合戸陵会にも応援参加をいただいております。

総会では、挨拶、会務報告などの議事終了後、その年伊勢原市内の中学校から厚木高校へ進学した後輩たちへ、記念品を贈り激励をしています。「高校生活への抱負」を語る新入生を、先輩たちが優しく見つめ、自分の若かりし日に思いをだぶらせて拍手を送る。

その後、講演会に移り、「わが青春の戸陵生活」と題して三～四人がリレースピーチを行っています。NHKの小林さん（高四回）の名司会で、その時代背景を思い浮かべながら、㋐ユニークな先生の授業風景、㋑プール掃除、㋒石畳のお説教、㋓勤労動員、㋔厚女との淡い想い出など、楽しい充実したひとときを送っています。

第二部は、部屋をかえて懇親会。同級生や年代の近い人が円テーブルを囲み、膝を崩して話に花が咲く。校歌の大合唱を最後に、先輩後輩の絆はいよいよ固く結ばれお開きとなる。

同窓有志によるゴルフコンペもこの秋20回目（年二回）を迎える。中31回卒の新倉先輩を頭に30名ほどが参加し、〝アツギ〟を語る一日となっています。

愛川戸陵総会・同窓林管理の報告

愛川戸陵会々長　佐々木　力　夫（高十回）

平成三年六月愛川戸陵会が誕生して十三年が経過した。

この間、小島菊代（中三十六回）甲賀國夫（中三十七回）徳岡忠行（中三十九回）の歴代会長による組織づくりと会員相互の親睦を図るための道筋を築いて戴き順調に歩んできましたが、突然若輩の小生が会長に就任することとなりました。

浅学非才の身ではありますが同窓会及び同窓会支部、学校の皆様のご支援ご協力を賜り責務を果たしたいと存じております。

今年の総会は例年のとおり中津川の河畔『料亭光晴』でご来賓として山田教頭先生をはじめ同窓会・事務局のご臨席を賜り国歌、校歌の斉唱後、議事を審議し原案のとおり了承され総会を閉じた。

続いて、恒例の同窓生による講演会、今年の演題は「海老名のウナギが死んだ日」と題して海老名市の出身、天野昭氏（高十四回）の講演が始まった。資料の『沈黙の春』参加者に読ませての講演。いつ誰が読まされるのか戦々恐々居眠りも出来なかったが、終始なごやかムードのうちに終了した。

いよいよ本日のメインイベントの大宴会中津川で釣れた若鮎を肴に先輩後輩入り乱れて美酒を酌み交わすまさに同窓会ならではの胸襟を開いた会合となった。

用意したカラオケのリクエストは無く替わりに応援歌の大合唱の後、再開を約し終宴したが、名残りを惜しんで二次会へ行くなど有意義な総会は終了した。

また、昭和十五年、紀元二千六百年を記念して愛川町の所有地に植林した「厚木高校同窓林」も九十周年記念事業の際に同窓会及び支部会の植樹、『憶い出の杜』のモニュメントを建設、その後一〇〇周年記念事業で『枝垂れ桂』の植樹ベンチ設置、及び『憶い出の杜』標識など整備した。

なお、九十周年記念事業の植樹以来四月の桜のお花見を兼ねた植樹と造林地の手入れ、六月末の下草刈りと定例の管理作業に汗を流している。特に一〇〇周年記念事業から大勢の方の参加を戴き作業も楽になった。

今年は、山田会長、小島副会長、八木校長、山田教頭、新たに伊勢原、海老名の両戸陵会、厚木連合、御所見、事務局の大貫、志村の先生、地元愛川戸陵会総勢五十名となり作業もはかどり予定時間内に終った。そして終了後の懇親会、冷たいビールで喉を冷やし、仏果山と経ヶ岳へ届かんばかりの校歌の大合唱、お陰様で植えた木々も順調に育ち一〇年前の荒涼とした同窓林も見違えるようになった。

いつも調理番、O氏の一句

師も友も　桂青葉を　仰ぐなり（今年の六月）

名残雪　越乃寒梅　手から手へ（今年の四月）

同窓生ならではの年代を超えた楽しい青春時代を彷彿させる雰囲気の中での作業と懇談会でした。

保健室での実習から
―養護実習を終えて―

鈴　木　佳奈子（高五十二回）

「厚木高校の保健室で実習をしてみたい」という希望を受け入れていただき、私は久方ぶりに母校の門をくぐりました。他の教育実習生のいない一人での挑戦、緊張と不安を胸に始まった三週間の養護実習でしたが、生徒とのふれあいの中で過ぎていく一日一日は発見と考えさせられることの連続であり、楽しく充実した三週間だったといえます。ケガの処置や身体症状への対応が頼りない自分に対し不甲斐なさを感じることも多々ありました。しかし、高校の保健室から生徒と関わっていく養護教諭としての自分なりの目標を見出すことが出来たように思います。

私が養護教諭になり学校に勤務したいと思ったのは高校生だった頃のことです。その頃はまだひたすらに部活に打ち込む毎日で漠然としたものでしたが、三年生になるにあたって進路を考えたとき、私は病気やケガの勉強や看護について学んだ上で学校という現場に戻ってきたいと思い大学の看護学科で勉強をすることを決めました。

一度目の受験の結果は思うようにはいかず、二度目での入学となりましたが、私にとって進路を考え、仲間と共に目標に向かいがんばった一年間は大切な思い出でもあります。

何かに熱中して取り組んだり、自分の進路を考え始めたり、ただなんとなく過ぎてしまったように感じたり…生徒一人一人のそれぞれの高校生活。時には結果がついてこない、わからないことだらけということもあるかもしれませんが、私は高校生活で自分で考え、行動した経験はどんな結果であれその後の自分の進む道の糧となるのではないかと考えます。また、その時に出会えた友人というのも大切な人となっていくことと思います。三年間と限られた時間の中でそれぞれに一生懸命にがんばる生徒達の側で、安心して学校生活を遅れるようにサポートしていきたい、それが実習を通して改めて考え感じた私の決意でもあります。

昨年度は看護師としての病院での実習も経験し、病気を患っている患者様との関わりの中で、人と接することの難しさを感じ、自分自身のことや患者様のことを何度も考えました。今回の養護実習でもそれは同じことが言えます。しかし、同じ学生や先輩としてではなく、先生として生徒と接することでこれまでとは違った生徒の一面を見ることもありました。まだまだいろいろな生徒と話してみたい、そんな後ろ髪を引かれる思いで実習を終えましたが、このような学びの場を与えてくださった厚木高校の先生方、そして生徒の皆さんに感謝します。

部活動ニュース

ダンスドリル部　全米制覇!!

勉学との両立を目指して、連日部活動でも熱心に練習を積み重ねている厚高生ですが、今年も好成績を修めていますので、ご報告いたします。

まず、報道等ですでにご存知の方も多いと思いますが、ダンスドリル部の二年生二十三名で構成された「ＩＭＰＩＳＨ」が、昨年の十一月に行われたＪＡＬＣＵＰ全日本チアダンス選手権大会において総合グランプリを獲得し、高校生のチームとしては初めて全米チアダンス選手権大会への出場権を獲得しました。三月十三日・十四日の両日にわたって、フロリダ州オーランドで開催された同大会でも、ラージバーシティ（大編成部門）優勝、さらに五部門からなるチームパフォーマンス部門でも見事に総合グランプリを獲得する大活躍をみせました。また、三月二十八日に幕張で行われたＵＳＡナショナルズにおいても、貫禄をみせてポンダンス部門で優勝しています。

続いて弓道部ですが、五月に行われた総合体育大会で、三年生の有路登志紀君が個人戦で第二位となり、八月一日から鳥取県米子市で開催されるインターハイへの出場権を獲得しました。

また陸上競技部では、弓道部と同じく五月に行われた総合体育大会で、三年生の佐藤圭介君が五千Ｍ競歩において、二十三分三十秒五六のタイムで第二位となり、関東大会への出場権を獲得しました。また、同じく三年生の古宮貴志君は三千Ｍ障害で第七位に入賞しました。六月二十日に埼玉県の熊谷で開催された関東大会では、猛暑の中、佐藤君が第四位と健闘しましたが、惜しくもインターハイへの出場権は逃しました。

最後に文芸部では、三年生の山口夢さんと高良彰子さんが、六月に行われた県予選会を経て、八月に群馬県で開催される関東大会への出場権を獲得しました。

同窓会支部・会長名・連絡先一覧

◉伊勢原戸陵会　会長　近藤　俊二（高６）
〒259-1131 伊勢原市伊勢原1-15-24　☎0463-95-4843

◉秦野支部会　会長　藤野　誠（中３４）
〒257-0035 秦野市本町3-10-1　☎0463-81-0419

◉座間戸陵会　会長　瀬戸　宏孝（高４）
〒228-0027 座間市座間1-3105　☎046-255-0062

◉相模原両青会　会長　篠崎源太郎（中３１）
〒229-1124 相模原市田名4986　☎042-761-6931

◉平塚支部会　会長　沖津　綏夫（高２）
〒254-0012 平塚市大神2760　☎0463-55-0682

◉横浜会　会長代行　長田　敬幸（高７）
〒252-1126 綾瀬市綾西3-14-15　☎0467-78-5762

◉津久井支部会　支部長　佐藤　弘（中３５）
〒220-0111 城山町川尻1661　☎042-783-1183

◉愛川戸陵会　会長　佐々木力夫（高１０）
〒243-0307 愛川町半原653-1　☎046-281-0149

◉川崎多摩麻生戸陵会会長　壁　義彰（中３３）
〒214-0003 川崎市麻生区高石2-36-2　☎044-955-7508

◉綾瀬戸陵会　会長　渋谷　芳郎（中３９）
〒252-1124 綾瀬市吉岡1781　☎0467-78-0642

◉海老名戸陵会　会長　赤井　孝一（中４２）
〒243-0411 海老名市大谷3813　☎046-231-4174

◉三浦半島戸陵会　会長　今井　武志（中３６）
〒249-0007 逗子市新宿3-1-6　☎0468-71-3355

◉御所見戸陵会　会長　内野　樹美（高１１）
〒252-0826 藤沢市宮原1468　☎0466-48-1019

◉大和戸陵会　会長　座間　茂俊（高２）
〒242-0007 大和市中央林間2-8-3　☎046-274-3520

◉厚木連合戸陵会　会長　小澤　澄男（高３）
〒243-0041 厚木市緑ヶ丘2-9-6　☎046-223-3332

事務局便り

事務局スタッフ十二名に

本年度四月の人事異動で、教頭として山田和彦先生（高24回）が着任されました。学校全体を見渡す立場から、本校の発展に寄与してくださることと思います。

また、事務局スタッフとして、新たに柿生高校より内田憲夫先生（高30回）をお迎えしました。若さと活力に富む方を迎えることができましたことは、事務局として誠に心強い限りであります。

以下に新しく加わっていただいた方を含めて、今年度の校内役員十二名をあげさせていただきます。今年度はこの十二名で頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

・大貫　睦男（高17回・体育）
・志村　祐一（高24回・数学）
・鈴野　康二（高25回・数学）
・山重　裕次（高28回・英語）
・山口　一郎（高28回・音楽）
・霜島　士郎（高28回・国語）
・内田　憲夫（高30回・理科）
・小山　隆（高31回・英語）
・渡辺　卓（高31回・社会）
・熊坂　和也（高32回・数学）
・山崎　朗（高32回・社会）
・松岡　洋明（高37回・数学）

編集後記

同窓会報第三十八号をお届け致します。ご多忙中にもかかわらず原稿依頼に快く応じて下さいました方々に、心よりお礼申し上げます。

今回の会報には、各支部会の近況報告として、伊勢原、愛川両戸陵会から原稿をお寄せいただきました。今後とも、各支部会の活動が益々活発になることをお祈り申し上げます。また、教育実習生として母校に戻られた方からの寄稿もあり、大変幅広い内容となりました。

当会報を今後、より充実したものに育てていくために、各支部会の近況及び活動の様子や、各種ＯＢ会・同期会の様子、会員諸氏の身近なニュースやエッセイ等何でも結構ですので、事務局宛に原稿をお寄せ下されば幸いです。なお、編集の都合上、原稿は毎年五月末日頃までにお寄せ戴きたいと思います。

最後になりましたが、会員諸兄姉のご健勝と益々のご発展をお祈り申し上げます。